

「沖縄を語りつぐ」 川平朝清、ジョン・カビラ著（岩波新書）

鈴木 哲雄（学園都市）

本書は、琉球王家に連なる川平家のファミリーヒストリーである。2019年FM局（J-WAVE）から放送された川平父子の対談に、朝清（父）氏、ジョン（息子）氏、ジョン氏の娘さんが執筆した原稿を合わせた構成で、今年6月に発行された。沖縄、台湾、日本本土、米国の歴史を背景に綴られている。研究者が描く沖縄の歴史とは趣が大分異なる。多くを教授された。一読されることを薦める。

朝清氏の父親は沖縄で石炭や黒糖を扱う事業を行っていたが、第一次世界大戦後の経済悪化の影響を受け、当時日本の統治下にあった台湾に渡る。朝清氏は台湾で生まれ、家族の苦勞に支えられて旧制台北高等学校に進学。台北高校では米国人（カール先生）による英語教育が行われていた。カール先生は1940年に帰国。太平洋戦争が激化する1945年「学徒出陣」により招集。敗戦後米軍統治下の沖縄にたどり着く。英語が理解できたことで米軍族関係の仕事（通訳）に従事する。その後、親族が始めたラジオ放送のアナウンサーを勤める。NHKのアナウンサー養成コースに応募し採用された。

1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約発効。本土と沖縄との温度差を感じる。翌年、放送を学ぶためにミシガン州立大学に留学。そこで米国人女性ワンダリーさんと出会い結婚。ワンダリー家は、平和主義を旨とするキリスト教一派の信者。朝清氏は、大学院に進学し放送経営を学ぶ。1957年に修了し、沖縄に戻る。沖縄で琉球放送の仕事始める。ミシガン州立大学学長の働きかけもあり、ワンダリーさんは那覇基地内の小学校教員の職を得た。1959年にジョン氏が誕生。出生届けには「慈温」の漢字をあてた。その後、沖縄放送協会の仕事に従事。米軍統治下の沖縄の生活と社会状況、途上国への放送技術援助、これからの放送のありかた等々に言及している。

ファミリーヒストリーは、次のように締めくくられている。

沖縄について伝えたいこと

沖縄の人たちのコンセンサスは、日米安保条約や地位協定、あるいは自衛隊そのものに反対という状況ではない。しかし、安保条約や地位協定の「内容」は絶対に変えなくては行けない。沖縄には日本の主権が及ばないところが大変多くある。沖縄以外の人たちも、日本が本当に主権国家であるのか、もう一度考えてもらいたい。日本は主権国家ではないということを。故安倍元総理とはまったく違う意味で「戦後レジームから脱却」を訴えたい。{本土復帰}ではなく「施政権返還」と言いたい。

PEACE（平和）への思い 若い世代に一番伝えたいこと



平和の礎 沖縄県営平和祈念公園 HP

沖縄へ行ってみたい。なかでも平和の礎（国籍、軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなった人々の氏名を刻んだ記念碑）には、是非訪れてもらいたい（左写真）。

私は、日米安保条約を廃棄し、アメリカと友好条約を結び非同盟の外交に進むことが、カビラファミリーの主張「主権回復と平和」とも一致すると考えるのだが、本書では「沖縄の事情」を反映してか、その道筋には言及されていない。